

中原一彦先生 追悼の言葉

と づか みのる
戸 塚 実
Minoru TOZUKA

東京大学名誉教授の中原一彦先生が令和 6 年 6 月 10 日にご逝去されました。人生 100 年時代にあつてあまりにも早いご逝去であり、大変残念です。心よりご冥福をお祈りします。

先生は昭和 47 年に東京大学医学部をご卒業後、研修医を経て昭和 49 年に第一内科に入局され、血液学分野で医師としての本格的な活動をスタートされました。昭和 57 年から米国スタンフォード大学に 2 年間のご留学を挟んで、平成 2 年に杏林大学医学部臨床病理学講座に助教授として移られ、翌年には教授となられ、同大学医学部附属病院中央臨床検査部長を兼任されました。平成 7 年には東京大学医学部臨床検査医学講座教授ならびに東京大学医学部附属病院検査部長に就任されました。平成 17 年に東京大学をご退職後は平成 27 年まで独立法人大学評価・学位授与機構教授を勤められました。先生の輝かしいキャリアの約 75% は臨床検査に関わってこられたこととなります。この間、多くの医師および臨床検査技師の指導に深く関わってこられたことは周知のとおりです。

私が先生を存じ上げるようになったのは、平成 9 年のことでした。全国の国立大学医学部附属病院検査部の部長と技師長による全国国立大学病院検査部会議に、信州大学医学部附属病院臨床検査部技師長として参加するようになったときでした。先生が同会議において常任幹事として中心的な役割を担われていることを知りました。また、「信州大学病院臨床検査セミナー」で何度かご講演をしていただく機会もあり、懇親会でお言葉を交わしていただきましたが、目下の私にも大変丁寧にお話いただいたと記憶しています。そのときは、い

ずれ先生の下でお仕事をさせていただく日が来るとは夢にも思いませんでした。

平成 15 年の初秋、東京大学医学部附属病院の技師長公募がありました。国立大学病院における技師長の公募が広まるさきがけになったと思います。私は公募の必要性を強く感じていましたので応募させていただくことになりましたが、予想外にも採用の通知をいただくことになりました。東大病院に赴任するに当って、当時信州大学病院臨床検査部の部長であった勝山努先生から言われたことがあります。そのお言葉をそのまま覚えてはおりませんが、内容は以下のようなものであったと記憶しています。「中原先生は素晴らしい部長でさらに紳士であり、いかなればお公家様のように上品な方である。それに対して君はいい技師長ではあるが、いかなれば野武士のようであり、くれぐれも失礼のないように気をつけなさい。」ということでした。

平成 16 年に私が東京大学医学部附属病院検査部に異動した年は国立大学法人化元年でした。国立大学病院の診療・教育・研究という大きな 3 本柱に経営という柱が大きくなって加わりました。先生と経営を含めて検査部運営に関して何度もお話をさせていただいたことが懐かしく思い出されます。コストパフォーマンスを考慮した臨床検査の効率的利用を推進することの重要性や大学病院検査部として医師だけでなく臨床検査技師の研究的活動をより推進することの重要性など、充実感のある意見交換ができたと考えています。野武士である私の本性は隠しきれず、時として失礼なことを申し上げたこともあったかと思いますが、先生はいつも穏やかに私の言葉に耳を傾けてくださいました。そしてその後、先生の

お考えを静かに語られました。決して一方的に私に指示するようなことはありませんでした。そのような話し合いは何かの課題があるときに実施していましたが、先生の発案で定期的に話し合いの機会を設けようということで、毎週火曜日に昼食を持ち寄って教授室に集まるランチタイムミーティングを企画してくださいました。毎回のミーティングでご指示やご指導をいただいた先生の低く重厚感のある声が今でも耳に残っています。

先生は東大病院1年生の私が臆することが無いように多くのご配慮をしてくださいました。その一つは私の執務室を2箇所用意してくれたことです。信州大学勤務当時から技師長としての事務的な業務を行うデスクと検査部のスタッフと並ぶデスクを持っていましたが、それをご存知だった先生が私の着任に合わせて検査部スタッフが実際に検査している部屋の直ぐそばに1室確保してくださいました。当時、技師長室は検査室とずいぶん離れており、新たに確保いただいた1室は私にとってとても仕事のしやすい環境でした。加えて、私の事務仕事をサポートしてくれる事務スタッフを配置してくださいました。このようなご配慮で臨床検査技師スタッフとのスムーズな交流も可能になり、充実した日々を過ごさせていただいたことを感謝しています。

残念なことに、翌平成17年春に先生は東京大学をご退職され、直接ご指導いただいたのはたったの1年間となってしまいました。しかし、ご縁があったのか先生がご退職後にお勤めになった大学評価・学位授与機構で再びご指導を得る機会がありました。それは、私が平成26年より同機構の学位審査専門委員として審査に参加させていただくことになったからです。年に3回程度の委員会でしたが、久しぶりに先生とお会いでき、近況報告を兼ねていろいろとお話させていただくことができました。そして翌年、先生は同機構を退職されました。思えば、

先生に直接ご指導いただく機会は、東京大学医学部附属病院および大学評価・学位授与機構のいずれも1年間ということになりました。先生との直接的な関わりが決して長くない私が「追悼の言葉」を記させていただくことに幾分の躊躇もありましたが、微力である私のそれなりのキャリアアップの要所で先生のご指導を得られたことは、私にとってとても大きく幸運であったという思いからお引き受けすることにした次第です。私は今まで多くの先生方にご指導いただき臨床検査分野で自分なりに充実した人生を送ってきました。その指導者の一人が中原先生でした。指導期間の長短に関係なく、それらの先生方に共通しているのは、私自らの意思で選択可能な多様な方向性を私に与えてくださったことだと思っています。

大学病院の重要な役割は人材育成だと思います。現在、先生に薫陶を受けた多くの医師および臨床検査技師が主要スタッフとして東京大学医学部附属病院検査部の更なる発展を支えています。また、一部のスタッフは東大病院検査部を飛び立ち、臨床検査に関わる各方面で活躍しています。私も先生の薫陶を受け、そして同検査部を飛び立った一人ですが、昨年の春に臨床検査分野の第一線を離れました。後方部隊として若手臨床検査技師の育成に少しでも貢献するために微力を尽くそうと考えています。もちろん、先生のご指導に比べれば足元にも及びませんが、少しでも先生のご意思に報いたいと思います。

令和6年11月16日、「中原一彦先生を偲ぶ会」が開催されました。多くの著名な先生方のご出席があったほか、東大病院検査部の現スタッフに加えて多くのOB・OGも参加されていました。あらためて中原先生のご人徳を認識した1日でした。

「中原先生。どうぞ天国からあの優しい眼差しで私たちを見守ってください。」

令和7年2月24日